

ロイヤルウエディングはお断り！



## トロワ

酒屋の跡取り  
もっさりとした外見とは逆に  
紳士なところも

## ショーレル・デック・モントルイユ

シャルトル王子の侍従  
モントルイユ公爵家の四男

## シャルトル王子

無愛想だが仕事は出来る王子様  
隠れニックネームはブランセ・  
シャルマン

## リヨン・ド・フォルカルキエ (サンドリヨン)

元化粧品会社勤務のOL  
前世の記憶を持っており、  
常にポジティブ思考の子爵令嬢

# Character Introduction

Royal wedding  
not accepted!

アベビル・ド・フォルカルキエ

リヨンの父親  
船の難破で行方不明に

リール

意地悪な義理の姉  
食いしん坊でお肉好き

ニーム

意地悪な義理の姉  
楽しいことが大好き

ヴァンヌ

意地悪な継母  
お酒や贅沢な暮らしが好き



# ロイヤルウェディングは お断り!

## Contents

### 本編

006

### 番外編・王子の勘

～ショーレは王子の能力(?)に驚く～

312

Royal wedding not accepted.





## プロローグ



「待てって！」

「待てって言われて待つヤツがいるか、バーカバーカ！」

「ちよ、梨世！」

「うっさいわ！」

とある駅前広場。

急な残業でクタクタになった私が勤め先のビルから出てきたところで偶然見てしまったのは、なんと自分の彼氏の浮気現場。もう最悪。

寒空の下、温め合うかのようにギュって抱き合ってる二人。

ここは見なかったフリでビルに引き返すか、それとも声を荒げて乱入するか。後者はないな、すでに疲れてるもん、そんな気力体力残ってない。じゃ、見なかったフリするか――。

そんなことを思いながら疲れ半分ではーっと二人を見ていたら、絶賛浮気中の彼氏と目が合ってしまった。

ギョッとする彼氏。そりゃ当たり前か。浮気現場見られてるんだから。

自分の中で何かがプチンと弾けた。  
私は二人に背をむけ、一目散にダッシュした。

とにかく必死で走って逃げる。

あの場から、彼から。

とにかく逃げ出したくて夢中で走っていたから周り全然見てなくて、派手なクラクションに我に返ると——横断歩道のど真ん中だった。

え、これやばくない!?

「目の前の信号は『赤』。迫るヘッドライト、急ブレーキに鳴くタイヤ。  
あ、これ終わった。」

「梨世っ!!」

そして最後に聞こえたのは、置いてきたはずの千夜ちやの声。

ああ、助からないならせめて。

生まれ変わったら、普通に幸せになれますように!



## 一・思い出す



「ねえお父様。王子様ってどんな人？」

いつもならお城での催し物にはお父様とお母様だけで出かけていくのに、なぜか今日は子供の私も参加させられています。王子様のお誕生日会だからでしょうか。王子様は私よりも二つ年上の九歳だから、お勉強よりも遊びのほうが好きですよ、わかります。お城は大人ばかりだからあまりお友達ができないのかもしれませんがね。

「賢くて、運動もおおできになるとっても素敵の方だよ」

「物語に出てくる王子様のような？」

私は絵本で見る王子様の姿を思い浮かべました。

白い馬に乗って颯爽さつそうとお姫様を助けに行く王子様。お姫様に向かって優しく微笑む王子様。

どれも素敵なお方ばかりなのでお友達になれるとしたらとってもうれしいです。

「そうだね……」

お父様はやや歯切れの悪い答え方をしましたが、想像の王子様の姿に夢中になっていた私は気が付きました。

いよいよ今日の主役の王子様に挨拶あいさつという順番が回ってきました。お父様は私の手を離し、そつと私の背を押します。お父様、一緒に行ってくれないのですか？

私がお父様を見上げてるといふのに背中を押すばかりで一緒に行ってくれる気配はありません。

行けという方には女の子が人だかりになつてばかりで肝心の王子様は見えないし。

……はあ。でも行かなくちゃ。

めめめめしても終わらないので仕方なく集団に近付きました。

王子様の近くに行けばプレゼント渡せるかな？ そう考えて綺麗な女の子たちの集団に沿つて王子様のいる方に進んでいたら、

「ちよつと！ 順番守りなさい！」

突然きつくそう言われ、誰かわからない人に腕をぐいと捕まれ引き戻されてしまいました。

「あの……では、一番後ろはどこでしょう？」

「一番後ろ？ そんなの自分で探しなさいな」

かけられるのは冷たい言葉。綺麗なドレスを着たかわいい女の子たちなのに……こ、怖いです!! すっかり怖気おびけ付いてしまった私は自分で最後尾を探そうと、しばらくプレゼントを手に集団の周りをウロウロしました。ようやく最後尾らしきところを探し出して並んでも、途中何度も横入りさ

れました。文句を言ったら睨にらまれるので、黙っていますですがストレス半端ないです。

なんとか王子様の元にたどり着いた時にはすでにへロへロでした。

やっと王子様に会えます！

そう思うと疲れも飛んで行き、元気が出てきました。

初めて見る王子様は、きらめく銀髪と青い瞳が印象的な、本当に絵本から抜け出してきたかのような素敵な方です。

たくさんの女の子たちがお友達になりたがる理由がわかります。こんな素敵なお人となら誰だって友達になりたいですよ！

あまりに綺麗な男の子だったので見とれてぼーっとしていると、その青い瞳にじろっと睨にらまれてしまいました。もたつくのろまはお嫌いなのかしら？

慌ててドレスをつまんでお辞儀をし、

「お誕生日おめでとうございます」

ちよつと震えてしまいましたがかちゃんとプレゼントも渡せました。

今は無表情だけど、プレゼントを見たら笑顔を見せてくれるのかな？ 微笑んだらどんなに素敵なんだろう——なんて思いながら王子様を見つめていると、

「ありがとう」

王子様はただそう言うと、そのまま隣のお付きの方にポイツと渡してしまいました。

ポイって、投げ捨てるように扱われた……！

その事実も衝撃でしたが、無表情は崩れるどころかうれしそうにすらしてくれないって……かなりショックです。

私の中の王子様の印象——強くて優しい——は、音を立てて崩れ去ってしまいました。

ショックも冷めやらぬうちに後ろに並んでいた女の子に突き飛ばされ、あれよあれよという間に私は集団からはじき出されていました。

私だけにあんな冷たい対応してるのかしらと次の子の謁見をこっそり見たけど同じ対応でした。

なんか感じ悪いなあ、王子様。

友達になるならもっと優しい人がいいと思うのはどうやら私だけのようで、

「王子様、今日もクールでかつこいい〜」

「冷たい視線も素敵！」

なんて声がちらほらと聞こえてきました。みんな見かけに騙だまされてませんか？

とにかく王子様へのご挨拶は済ませましたので、後はお父様達と一緒にいきましょう。おしやべりできるようなお友達もいませんし。

「お父様たち、どこにいるのかな？」

しかし、あまりの人の多さに、なかなか両親を見つけれなくて途方にくれていると、

「小さなお嬢様、誰かお探しですか？」

と、若い男の人に声をかけられました。

王子様のようにかっこよくなるけれど、ニコニコ優しそうに微笑んでいるお兄さんです。

「お父様とお母様を探しているのです」

「それはお困りですね。僕と一緒に探してあげましょう」

「ありがとうございます！」

知らない人ばかりで不安を感じていたので、私はなんの疑問も持たずに、差し出されたその手を取ってしまいました。

そして私たちは両親の姿を探して庭園内を歩き始めました。

なんかおかしいなあと感じ始めたのは、探し出してしばらく経ってから。

お兄さんの連れて行ってくれる方向、お父様たちどころか、あまり人がいないような……？

「ここはあまり人がいませんよ？」

「こっちでいいんですよ」

にっこりと微笑み返され、おまけに手を、さらにぎゅっと握りしめられてしまいました。

本能的に何かがおかしいと感じた私。その微笑みに背筋がぞくぞくとした私は、

「やっぱり一人で探します！」

強く握られた手を振りほどこうとしましたが、そこは大人と子供。全くほどこけません。

しかも私が必死になって逃げようとしているのを、お兄さんは楽しそうに見おろしているし。

ナニコレコワイ。

お兄さんの微笑みがさっきまでの優しいものではなく、どこか粘着質なものに見えた時。

うっわ、こいつ変態だよ。

突然私の脳内に女の人の声が響きました。——今ノハ誰ノ声？

「ロリコン？」

「は？」

逃げようとするとする手も止まるほどの衝撃。「ロリコン」って何？ さっきの声は誰？

聞いたこともない言葉がすらっと出てきて混乱しているとゴスツという鈍い音が聞こえ、呻き声を上げたお兄さんが頭を抱えてその場に倒れ込みました。

何が起こったか全然わかんないけど、よかった、これで逃げられる。そう思った時です。

『ロリコン』っていうのは、幼女や少女にのみ性欲を感じる人のことを言う言葉よ。ほら、ちょうどこいつみたいなの。

また、頭に声が入ってきました。

自分の中に別の自分がいてしゃべっているみたいな不思議な感覚。

とにかく突然起こったことが理解できず呆然していると、次の瞬間、頭の中にざざーっと水が流れ込んでくるように「記憶」が入り込んできました。

私は前世、日本という国で梨世という女性だったこと。

死んで、生まれ変わってこの世界にいること。

梨世に関する記憶——学校に行つて習つたこと、社会に出て働いていたこと。

——そして、リヨンとしての今までの記憶が混じり合う。

いろいろな記憶が、頭の中で交錯・混乱しています。私<sup>リヨン</sup>が考えてるのか、梨世<sup>リヨン</sup>が考えているのかもわからない、もはやカオス。——いやいや、カオス<sup>リヨン</sup>って何よ!!

ああもう、どうなってるの!?

あまりの急激な変化に耐えきれず、とうとう私は気を失ってしまいました。

「誰か倒れたぞ!」

私はその場に崩れ落ちる瞬間に聞こえた声は、いったい誰のものだったのでしょうか――？



## 二・馴染んできました



私は前世、梨世と言う名の日本人でした。

二〇代半ばを超えた百貨店のコスメコーナーの美容部員。結婚は……そろそろしたいなあって思ってたような？ してなかったような？ てゆーか、すごく嫌な感じで人生終わった気がするけど、うーん、思い出せないや。まあいつか？

今の私はリヨン。フォルカルキエ子爵の娘で七歳。一人っ子。優しいお父様とお母様の三人で暮らしています。爵位は低いけど領地が豊かなので、結構お金持ちだと思えます。

過去と現在が頭の中でぐるぐる渦巻いて、ごちゃごちゃ溶け合って馴染んでいく感じがします。

ああ、そうだ。私、変態に襲われたショックと前世の記憶が蘇よみがえったのとかで、王子様のお誕生日会で気を失ったんだ。それから私はどうなった？

今の自分に意識が戻ると、私は庭園の片隅——倒れた場所で誰かに抱きかかえられていました。

ん？ 一難去ってまた一難？

心配そうに私を覗き込む綺麗な青色の瞳はどこかで見覚えあるような？

「気が付いた？」

「あ……」

「さっきの悪い人はもういなくなったよ。大丈夫？」

この人が助けてくれたのかな？ そういえば気を失う前に聞こえた声と似てる気がする。

「そうなんです。よかった」

「ああ、申し遅れましたが、僕は王子の侍従を務めているシヨールといいます。怪しいものではありませんよ」

「シヨール様ですね！ 怪しいなんて……ふふふ！ 私はフォルカルキエ子爵家のリヨンと申します」

とにかく変態の手から助けていただきありがとうございます！

「もう大丈夫そうですね。では会場に戻りましょうか。ご両親も探しておられるでしょう」

「はい」

私が笑ったのを見て大丈夫と確信したシヨール様は、私が立ち上がるのを助け、そのまま手を取り元の庭園——パーティー会場へとエスコートしてくれました。

手を取られてもさっきの変態と違って気持ち悪くないし、むしろ安心するっていうか……シヨール様は優しいお兄ちゃん、って感じですね。

それから会場に戻ってもシヨール様は私のそばを離れず、ずっと話し相手になってくれました。でもお仕事は放り出したままでいいのかな？

「シヨール様は王子様の侍従様なのでしょう？ 王子様のおそばにいないのですか？」

「大丈夫、シャルトル王子のところには別の侍従がいますから。侍従は僕以外にもたくさんいるので、僕一人くらいいなくて平気です」

優しく微笑む青い瞳……ああ、さっきの王子様の瞳の色と同じだ。だから見覚えがあったのね。「侍従様って、いつも何をしているんですか？」

「王子のお世話をしたり話し相手になったりですね。剣の稽古の相手をしたりもありますよ。僕と王子は歳も近いので友達のような感じです」

シヨール様はざっくりと侍従のお仕事について説明してくれました。要するに『お友達』なんです。ね。

「シヨール様はおいくつなんですか？」

「僕は十歳です。リヨンさんは……僕より年下ですよね？」

「七歳です。リヨンでいいですよ。さんはいりません」

「そうですか？　じゃあ僕も、様はつけないでいいですよ。ついでに普通に話してほしいですね。リヨンと僕はもう友達でしょう？」

そう言つて首を傾げ、微笑みかけるシヨール様。

涼やかな青色の瞳でじっと私を見つめてからの破顔。うう、美少年の微笑みの威力を知り尽くしてますねアナタ！　破壊力抜群です。

「でもシヨール……は丁寧な言葉でおしゃべりしてるわ」

「これはもはや癖なんで気にしないでください」

「ふうん？」

年上にタメ口は……抵抗あるけどいいって言うんだから素直に従つておきますか。

「リオンは王子のところに行かないんですか？」

シヨールが王子様の方を見ながら聞いてきました。

先ほどと変わらず王子様は周りに綺麗な女の子たちを侍ら……ゲフゲフ、囲まれています。

「スペースがないわ」

「そうですね。○公爵令嬢に、△侯爵令嬢に……」

苦笑いしたシヨールが、王子様の周りのお嬢様方のお名前を連ねていきます。とにかく、「公爵」だの『侯爵』だの、一流貴族のお嬢様ばかりのようです。

「その中から王子様の『お友達』を選ぶのね」

「……本当はお妃候補ですけどね。って、まだ幼いリヨンに言つてもわかりませんね」

クスツと笑って結構大事なと言っちゃったよね？ リオンはわからないけど梨世はわかっちゃうよ！

「おきさきこうほ？ なあに。それ」

キョトンと首を傾げ、わからないフリをします。リオン七歳だもん。

「まあ、王子の女友達、つてことですよ。あの中から正妃せいひを一人、側妃そくひを何人か選ぶんですけど、王子はどれも拒否してるんですね。選ぶとしても正妃一人がいいって」

ナニソレ聞いちゃまずくない？ ショーレ、それは部外秘じゃないですか？

思わずショーレを二度見しました。

いや、ここは理解した顔しちゃダメなやつですよ頑張れリオン！

「うーん、よくわかんない」

私はわからないフリをして首を傾げました。ああもう、最優秀女優賞いただきですよこれ。

「リオンにはまだ難しい話でしたね。すみません」

爽やかに笑ってますが、ショーレ……。

内心ジト目になった私です。



### 三・悲しみの後に



年月はゆるやかに過ぎていき、私も一七歳になりました。ちょっと中の人梨世に追いついたかな。まあ、大人の話に首を突っ込んでも怪しまれない歳にはなりました。いや、子供の演技するってなかなか大変だったんっすよ。(ぶっちゃけすぎ！)

相変わらず王子様の婚約者は決まっておらず、貴族令嬢私たちはことあるごとにお城に呼び出されています。

でも呼ばれるメンバーが少しずつ淘汰とうたされていった結果、ヴィールパンヌ侯爵様とメリニヤック侯爵様のお嬢様が、目下の最有力候補です。金も地位も名誉もコネも美貌もある！

今日のイベントは『王子様の演奏を聴こう！』だそうです、私たちはいつものようにお城に集められました。一種の発表会ですよ。王子様は楽団と一緒にヴァイオリンを弾いてらっしゃって、もちろん有力候補のお嬢様方は最前列を陣取っています。

淡々とヴァイオリンを弾く王子様に熱視線を送るお嬢様方。王子様、ちゃんと受け止めています

か？

「もういい加減、王子様もターゲットを絞ればいいのに」

「最近ちよつと情勢が微妙なので、まだ絞りきれないんですよ」

私がサルクチュアリ——壁際で、王子様とその取り巻きお嬢様の一団を眺めながら呆れていると、シヨールが隣でクスクスと笑っています。

美少年と表現するにふさわしい見目かたちだったシヨールですが、成長して背はさらに伸び、短めに整えた銀の髪はキューティクルツヤツヤ、「モデルかつ！」とツツコミたくなるくらいにスタイルよしのイケメンになっています。高貴なサファイアのような青い瞳を細めて微笑む顔は相変わらず綺麗です。眼福がんぷくです。

王子様とよく似た『青い瞳』は王家につながる家系の証あかしだそうで、なんとシヨールはモントルイユ公爵家の四番目のおぼっちゃんまでした。王様の弟さんがシヨールのお父さんで、王子様とは従兄弟とこ同士って、めっちゃ高貴じゃないですか。よく子爵の娘ごときにタメ口許してるなあこの人。それはいいとして、情勢って何？

「情勢って？」

「うーん、バランスでしょうか？ 今お妃をどっちかに決めてしまえば、そのどちらかの家が勢力を増してしまいます。それが不味いんですよ」

「ふうん。じゃあ、どっちもお妃様にしちゃえばいいじゃない」

「それは王子がウンと言わないんです」

「やっぱりアレ？ 妃は一人に限る（キリッ）ってやつ？」

「そうです」

「王子様、意外とピュアなんだね」

「そうですね」

「政情が安定しないなら両方ともお妃にしちゃって、上手うまくバランスとつたらいいのに。早くお妃様決めちゃってこんなイベントやめちゃってください。」

「しよっちゅうお城に来るのは気を使うし、お嬢様方のドロドロした面を見るのもうんざりしてきてるんです。アノヒトたち、王子様を見てない所では足踏んだり突き飛ばしたり平気でやってるんですよ。私だって突き飛ばされたの、一度や二度では済まないんだから！」

「顔はいいけどいつも無表情で何考えてるかわからない人の奥様って、人を蹴落としてまでなりたものかしら？ プランセ・シャルマン〴〵なんて言われてるけど、魅力的に見えたことがないわ」

「リヨン、はつきり言いますね」

「あ、ごめんなさい！ 今のは聞かなかったことにして！」

「はいはい。それよりそのシャルマン〴〵は王子に言わない方がいいですよ」

「シャルマン（笑）〴〵だから？」

「じゃなくて！」

「王子様はお名前をシャルトルっていうんだけど、それに引っかけか『プランセ・シャルマン』っていう隠れニックネームがあるんです。でも『シャルマン』って『チャーミング』って意味

でしょ？ あの王子様のどこがチャーミングなんだか全然理解できない。だから私はこっそり『シャルマン』の後に『笑』をつけてます。

嫁は一人とかカッコつけてないで、もうちょつと頑張つてよ、王子様！

私は今日も無愛想な、ヴァイオリンを弾くシャルマン（笑）王子に念を送っておきました。おつと、シャルトル王子でしたね！

ですがこの直後から、しばらくパーティーが開かれることがありますでした。

原因不明の高熱が一週間以上続いて衰弱死してしまうという恐ろしい病気が都を襲ったのです。

きつと前世ならば、最先端医療とかなんとかで早急に治療法を見つけたりできるので、いかんせんココはなんかよくわからない、でも近代化はしてない世界。

病人が出たといえは医者とか薬草屋さんが出てきて薬投与。以上終わり。注射すらないんですよ！

お菓飲んで治る病気ならいいけど、さすがに手術が必要なレベルのものは治らんでしょ。くう……！ 私が前世医者か看護師さんだったらなんとかでき……るもんじゃないですね。圧倒的に技術も機械もないし。

いやいや、そんなネガティブなこと言ってる場合じゃない！ とりあえずできることをやるし

かないでしょう！

身の回りの衛生面に気を付け、マスクを手作り。こまめな手洗いうがい絶対。そして栄養価の高いものを食べて体力つける。

あとそれから……、ってやれることを全力で実践してたのに、なんとお母様が病に感染してしまい、あっけなく亡くなってしまったんです。

突然の出来事に私は悲観にくれ……：……てる暇はありませんでした。私以上に悲しみにくれるお父様の衰弱が激しくて、私が自らお父様のお世話をすることになってしまったんで。

使用人の作った食事は食べないから私が代わりに作って。前世の自炊経験がこんなところで役に立つなんて思いもしなかったなあ。一人暮らししててよかったです。

半年ほどかかってようやく流行病はやりやまいは沈静化してきました。王様たちは今回の件の対応に追われ大忙しだったそうです。

そうこうしてらうちにお父様の悲しみもなんとか癒えいえ、お仕事復帰もできました。忙しい方が何かと思ひ出さずに済んでいいんだとかなんとか言って、若干ワーカホリック気味になってます。

家を空けることもしよっちゅうで、ひと月留守にするとかざらにあります。

今日も七日ぶりに帰ってくるので、お父様のお好きなものをたくさん作って今か今かと待っている

ると、表が騒がしくなりました。やっと帰ってきたんですね！

早く会いたくて玄関まで出迎えに行くと、ちょうど勢いよくドアが開いたところでした。

「ただいまリヨン！ リヨンに話したいことがあるんだけど聞いてくれるかい？」

いつになく上機嫌で帰ってきたお父様が私にハグしてきます。

お父様がこんなにご機嫌なのって、お母様が亡くなって以来初めてじゃないですか？ そんなにうれしいことがあったんでしょうか？ 大口の商談がまとまったとか？ 領地で金鉱見つけたとか？

「おかえりなさい、お父様！ 話したいことって何？」

いったいどんないいことだろうとワクワクしていたら。

「新しいお母様を見つけたんだよ！」

……………？ え？

私、一瞬フリーズ。

でも私とは対照的に、満面の笑みのお父様。え、ちょ、新しいお母様？ え、もう再婚する気と

か？ え？ え？

「え？」

「え？」

お父様、あんなに身も世もないほど取り乱して嘆き悲しんでたじゃないですか！ 君しかないとも言ってたじゃないですか！

それが半年で言をげん翻ひるがえすなんてえ……。



#### 四・新しい家族

お母様が亡くなって半年、お父様が新しいお母様を見つけてきました。

あんなに身も世もないほど嘆き悲しんでいたくせに……と言いたいところですが、嘆き悲しむお父様より幸せなお父様を見ている方がいい、よね。

ちよっと（かなり？）面食らいましたのが反対する理由なんてありません。

「いい方を見つかったんですねお父様。ぜひ私にも会わせてくださいね」

「もちろんだとも！」

私はお父様の再婚を受け入れることにしました。

「リヨン、リヨン！　こちらが新しいお母さんだよ。ヴァンヌ、娘のリヨんだ。仲良くやってくれ」

衝撃の発言から数日後。

お父様が新しいお母様をうちに連れてきました。

「初めましてリヨンさん。私はヴァンヌといます。よろしくね」

そう言つて挨拶するヴァンヌさん。

亡くなったお母様は青い瞳にふんわりとした金髪が美しい、すらっとしたスレンダー美人だったのですが、ヴァンヌさんはそれとは真逆の小柄でふっくらした人です。ブロンズの豊かな髪をきつちりとまとめ髪にしている感じは、しっかり者のように見えます。若い頃はキリツとした美人だったのかもしれませんが……お母様とは対照的な人。お父様、好みが変わつたのかしら？

「娘のリヨンです。ヴァンヌさん、よろしくお願ひします」

いきなり『お義母<sup>かあ</sup>さん』というのもなんだかなあとつい名前で呼んだのですが、ヴァンヌさんは悲しげな顔を見ると、

「私のことは『おかあさん』と呼んでちょうだいな。これから親子になるんですもの、他人行儀は

やめてちょうだい」

私の手を握りしめてそう言いました。

「そうだよ、リヨン。ああそれから、家族が増えるのはお母さんだけじゃないんだ」

「え？」

私とヴァンヌさん——お義母様を両腕に収めたお父様の言葉に私は驚きました。

まだ家族増えるって？ まさかお義母様のお腹に——おっと、ふっくらしてるから入ってるのか  
そうじゃないのかちよつとわからないなあ。

「そうじゃない」

あ、そうですか。私の思考をエスパーしたお父様が即否定しました。

「ヴァンヌにも前の旦那さんとの間に子供がいるんだよ。リール、ニーム。リヨンだ。今日から君  
たちの妹だよ」

お父様がそう言って呼んだのは、二人の娘さんでした。

お義母様も再婚なんです。子連れ同士の再婚、いわゆるステップファミリーってやつですね。

「リールです。二〇歳よ。よろしくね」

ブルネットのくせ毛のほうの娘さんが言いました。

「ニームです。一九歳。よろしくね」

ブロンズのくせ毛のほうの娘さんが言いました。

二人とも私よりも年上なのでお義姉様ねえさまですね。



和やかな顔合わせの後の食事会で、お義母様たちの境遇が語られました。

お義母様の元旦那さんも例の流行病に罹かかつて亡くなったそうです。

元旦那さんは都でお商売をしていたので、お父様とは取引があつて出入りしていたところ、同じ境遇（配偶者が病没）を知り、慰め合っているうちに……つて、よくある話ですよ。もはやツツコむまい。

「同じ境遇、みんなで仲良くやっついていこうね」

お父様が綺麗にまとめました。

それからしばらくして、お義母様たちがうちに引越してきました。

亡くなられた旦那さんは商人さんだったけどお金持ちだったらしく、ドレスや宝石、靴だのなんだの、三人の荷物がどっさり届きました。

「前のお家よりお部屋が広い！」

「それに一人一部屋ある〜！」

お義姉様たちがはしゃいでいます。

うちもお金持ちの部類なので、ご先祖様が建てたお屋敷も、名門貴族様のお屋敷ほどではありません。

せんが立派なものなので、そこらの商人のお屋敷よりは広いです。

お義姉様たちは広いのがお気に召したのかずつとはしやぎつばなしだけど……さつさと片付けたらしいのに。

我関せず。見ないふりして部屋に引きこもりましょ。

「ほらほら、早く片付けてしまいなさい」

「そうだよ、明後日あさってにはお城のパーティーに行かなくちゃならないんだからね。早く片付けてしまつてドレスとか用意しよう」

「はあい、お義父様とうさま！」

お義姉様たちには片付けろつて言つてるお義母様ですが、自分の荷物はお父様がせつせと片付けて……つて、うお〜い！ お父様！ なんでもうすでに尻に敷かれてるんですかっ！ これには思わずツッコみました。



## 五・フラグがポキッ

新しい家族との生活に慣れてきた頃、シャルトル王子の一九回目のバースデーパーティーの日がきました。

もう毎年毎年パーティーとかいらなくなる？ 厳選されたメンおバ紀バ候だけで、内輪でやっつけばよ

くない？ こっちはわざわざドレス作ったりプレゼント用意したりって、いろいろ大変なんだからね！

誰か『流行病で疲弊した国民ほっといてパーティーか！』とか批判してくれないかしら……って、残念ながらそれはなさそうなんですよね。

王子様は王様と一緒に次々と政策を展開していったって、病気を駆逐（くわく）しーの、上下水道完備しーの、病院建てまくりーの、その他いろいろ、あつという間にこの国を近代国家にしまったのです。パーティーなんぞ開いている余裕もないほどに働いていたみたいです。

前世の記憶がある私だからこそ気付いた変化だけど。次は産業革命でも起こるんじゃないのかってくらい、一気に文明が進歩しました。

そんな王子様のお誕生日ですから、国民も納得のパーティーなわけです。

しかしあの無愛想な王子様がそんなやり手だったとは……。愛想はなくても政治的手腕はあるんですね。さすがプランセ・シャルマン（笑）。国民の王子様人気はうなぎのぼりですよ！

でも私の中の印象は暴落が止まらないですけどね！

誕生日パーティーといえは、初対面の時にせっかく渡したプレゼントをポイツと投げられた苦い記憶がまだ鮮明に焼き付いています。結構根に持っていたりしてると、実はあの時以降、そういう扱いはされなくなっただけです。さすがにアレはないと誰かに（ショーレ？）怒られたのでしようか。だとしたらザマミロだけど。

別に渡したくもないプレゼントだけど、せっかく用意したし王子様に渡して帰りましょうか。

勝手知ったるなんとかで、私はサクッと最後尾を探し出し並びましたが、今日がデビューなお義姉様たちはお嬢様たちが作り出す人垣にあっけにとられています。

「お義姉様たち、こちらに並ぶんですよ」

「え？ ウソ。王子様に会うのに行列するとかありえない？」

「ちよつと！ 王子様が見えないじゃないの！」

肝心の王子様の姿が見えなくて驚くお義姉様たち。

あまり目立つと取り巻きのお嬢様たちから白い目で見られますよと忠告したにもかかわらず、お義姉様たちはなおも王子様の姿を見ようと飛んだり跳ねたりしていたので、すぐに周りから目をつけられ、やれ『行儀が悪い』だの『うるさい』だのと総口撃をくらいました。

そして案の定、お義姉様たちはプレゼントを渡すとそのまま列からはじき出されていきました。

そんな義姉<sup>あね</sup>たちの行方を不安に思いつつも私の番が来てしまったので、王子様にプレゼントを手渡しながらご挨拶します。

「お誕生日おめでとございます」

「ありがとう、フォルカルキエ子爵令嬢」

「覚えていたただけで、ありがたき幸せにございます」

「うむ」

珍しく、というか初めて王子様に声をかけられたから一瞬うろたえかけたけどなんとか平静を保てました。びっくりした。

ご挨拶が終わったら速攻輪の外にはじき出されるのが、今日に限って！

いつもならあまり王子様のお顔も見ずにこの場を立ち去る（追い出される）のですが、思わずその美しい顔を見ると、冷たい青い瞳がこちらを見て——あ、いつも通りの無表情だわ。なんだ、ただの気まぐれか。

「ふう、おどろいた〜」

王子様の気まぐれに驚かされたけど、とりあえず今日のイベントは終了！あとは適当に時間を潰すだけ……と、んんん？

「ちょっと、あなた」

いつもの定位置・壁際に行こうとする私の前に、ずいっと立ちはだかるお嬢様数名。なんで私睨まれてるんですか？あ、まさか——。

「シャルトル様に声をかけていただいたからって、いい気にならないでくださいませね」

きたこれ。予想通りすぎて、笑いが出てきます。古典ギャグか。名前呼ばれたくらいで浮かれるかっちゅーの。そもそも王子様なんて眼中にないし。向こうの眼中にもないけど。

「はあ……」

「そうよ。あなたくらい身分でお姫様に選ばれるわけないし」

「あら、泣いてらっしゃるの？ これくらいで？ とにかく、シャルトル様にはヴィールバンヌ侯爵令嬢がお似合いということ覚えておいてくださいませね！」

あまりのベタな展開すぎて面食らつてると、お嬢様方は私がビビつてると勘違いしたのか、攻める攻める！ ごめんね、こっちは精神的アラフォー。これくらいじゃビビりませんのよ！

しかもかわいらしいことに、ツルツとこの茶番の黒幕を暴露っちゃってますし。ははくん、そうですか。ヴィールバンヌ侯爵令嬢が私を潰しにかかったのですか。

ヴィールバンヌ侯爵令嬢こそ最有力のお妃候補、こんな子爵の娘ごときがライバルになるわけないでしょ！

王子様にお声をかけてもらっただけで、こうして有力貴族のお嬢様に睨まれるなんて貴族社会怖いところ！ でも安心してください。頼まれてもお妃なんかになりたくありませんから！

「そんな……、わたくしは、けしてそんなつもりはございませんのに……。王子様にはこんりんごい金輪際近付きませので、どうかお許しくださいませ」

あんな無愛想で感じの悪い王子様、こっちから願ひ下げだわ。

本音は心にしまつて、私はしおらしく謝っておきました。

「うっ……。そ、そうなさるのが無難ですわ」

「そうね、二度目はなくてよ」

瞳が潤うるんでしまつて泣いたように見えたようですが、これ、笑いをこらえすぎたからなんだけど。

ま、ちようどよかったです。

私を泣かせてしまったと勘違いしたお嬢様たちは一瞬<sup>ひび</sup>怯んだようですが、私に戦う意思がないと見ると、捨て台詞<sup>ざいご</sup>を吐いて身を翻しました。

でもただでは済まさないのがこの人たちの性悪なところ。

「あら、失礼！」

振り返りがてら手にしていた飲み物を私のドレスに引つ掛けていきやがりました。

おうい！ このドレスどうしてくれるのよ！

久しぶりのパーティーなのに、ついてないですね。

私は目立たぬよう、こっそりひっそりパーティー盛況要員に徹していたはずなのに。王子様が気まぐれに話しかけるからっ！

ドレスも汚れてしまったしテンションだだ下がり。あくもう早く帰りたい。何もしたくない。

「リヨン！ ドレスが汚れてるじゃないですか！ 何があつたのですか？」

私が壁際ではんやりしていると、ショールが慌てて走ってきました。

「ああこれね、さつき人にぶつかった拍子に飲み物がこぼれちゃったの。私ったらドジよね」  
「ふうん？」

さっきの出来事を思い返すのも片腹痛いので適当なことを言って誤魔化ごまかしたんだけど……シヨールの青い瞳がすっと眇こめられキラーンと光ったのはきつと気のせいよね？

「だから今日も壁際こで大人しくしてるわ」

「わかりました」

シヨールは少し考えるそぶりをしてから私の腕を掴つかみ、強くはないけど逃がさないという意志を持った力で引つ張り、歩き出しました。

「え？ ちょっと、シヨール？ どこ行くの？」

ズンズン歩くシヨールの早さに合わせて早足になります。

「その汚れはさすがに目立つので、着替えましょう」

「へ？ 着替え？ そんな、私、着替えなんて持ってきてないわ」

やんごとなきお嬢様ならば着替えの一着や二着持ってきているでしょうが、うちはそんなことしてません。

替えのドレスなんてどこにもないのにどうするつもりなの？

「大丈夫。王女のドレスがありますよ」

「王女サマアアア!?」

振り返りざまニコツと笑ったシヨール。うおおおい！ この人何言ってるの！

王女様というのはシャルトル王子の妹で、確か私よりも一つ年上だったはず。

王女様のドレスを借りると聞いて益々抵抗するけど全然ビクともしなくて、気が付けばもう私とシヨールの足音だけが響く誰もいない廊下。シヨールは王女様のクローゼットに向かったのか！

「無理無理無理無理！ 王女様のドレスなんて恐れ多すぎて借りれないよ！ こんな汚れなんてな」とか隠して誤魔化すからもういいって」

渾身こんの力で踏ん張りシヨールを止めました。

急に私が立ち止まったからシヨールはちょっと体勢を崩しましたが、私がテコでも動かないのを見て取ると、

「いいからいいから」

「きゃー！」

そう言って私を抱き上げてしまいました。くそう！ 強硬手段にでたな！

「ほんと、王女様のドレスなんて着れないわ」

「王女はちゃんと話のわかる人だから。ほら暴れないで」

「誰が話を通すのよ！」

「僕だよ。侍従だけどこれでもいちおう王女とはいとこ同士だからね」

「……………」

そうだった。私ってばすっかりタメ口きいてるけど、シヨールってモントルイユ公爵家のおほっちゃまだった。シヨールが気さくだからうっかり忘れがちだけど。

姫様付きの女官さんが持ってきてくれたのは、淡い紫のドレスでした。

着てきたドレスより少し淡い色合いで、シフォンがふわふわとしますがあまりデコデコしていない、どちらかというとシンプルなデザインで私好みです。王女様、好み似てるのかな。

女官さんたちに手伝ってもらい手早く着替えて、外で待機しているシヨールのところに急ぎました。

「よく似合ってますね。王女も、それはリヨンに下賜かしすると言っていました」

私の姿を見たシヨールが絶賛してくれましたが、ワタシ的にはこの短時間の間に王女様に話を通してきているあなたに絶句ですよ。どんだけ仕事早いの。

「……ありがとう」

「どういたしまして。リヨンは目立つんですから、気をつけないといけませんよ」

「えっ」

うそん。これは通りがかりの人にぶつかって、偶然飲み物が溢あふれて汚れちゃったのよ？ 私が目立つのと何が関係——って、もしかして、バレてる？

シヨールの言葉に頬を引きつらせていると、やれやれというように肩をすくめたシヨールは。

「リオンは自分の魅力がわかってない様ですね。小さい頃からそうでしたが、透き通る様な白い肌に蔷薇色の頬と唇。ふんわりとした金の髪はキラキラと輝く天然のティアラのよう。何よりそのアメジストの瞳で微笑まれたらどんな男でも墮ちるんですよ？ 証拠と言ってはなんですけど、前に不審な男に連れ去られたことがあったでしょう？ あれもリオンに惹かれたからですよ。あんなに幼くても魅了してしまうんですから大人になった日にはどうなってしまうんでしょうね？ 男は魅了され、女はその美貌に嫉妬する。……はあ。ため息が出ますよ」

すらすらと出てきたのはすごい恥ずかしい賛辞の数々。

確かに、客観的に見て私はかなり美少女と言っていると思うけど……目の前で言われるとめっちゃ恥ずかしい。

でもシヨールレの話からすると、お嬢様方が嫌がらせをしたのって、私に嫉妬したからってこと？ うーん、なんか違う気もするけど、シヨールレがそう思ってるならそう勘違いさせておきましょうか。あの子たち（もしくは黒幕V嬢）に報復とかされたら困るし。

「私よりも綺麗で素敵な人はたくさんいるのに」

「わかってないですねえ。リオンは飾らなくても綺麗ってことですよ」

褒めてくれるのはうれしいけど、あんまりこんなことばかり言ったら、シヨールレ、チャラ男になっちゃいますから気をつけてください。

「でも、誰彼となしにこんなふうに褒めちゃダメよ？ 勘違いされるからね」

ただでさえシヨールはイケメンなんだから、こんなこと言われたら勘違いする女子続出です。

「え？」

「え？」

シヨールが驚くから私も驚いちゃったじゃないですか。どこに驚きポイントあった？

あ、まさか。

これがいわゆる『フラグがぼきつとね☆』ってやつ？



## 六・わかってしまった！

私の「勘違いするから他の子に褒め褒め上げ上げセリフ言うなよ」という言葉に苦笑いしたシヨール。

シヨールはイケメンな上に公爵家のおほっちゃまで、王子様の側近（つまりエリート）です。

そんな好物件が子爵ごときの娘とどうこうなんてありえません。シヨールと私は友達、HOT恋

人！　ハイスベック男子はハイスベック女子とくつつくのが理想であつて、それは決して私ではないのです。そして私もお断りなのです。

「ほんつつつとに、そんなチャラ……もとい、軽々しく女性を褒めちゃダメよ」  
しつかり釘を刺しておきましょう。

「そうきましたか……。さすがリヨン。王子の虜とりにならない唯一のお嬢様ですね」

人にごこのかの掃除機みたいなコピーつけてんじゃねーよ！　……違くて。

さっきの微妙な顔から一転、プハッと吹き出したシヨールはそのままおかしそうにくつつつと声を潜めて笑っています。失礼な。あんな無愛想な王子様と、それに付随する面倒なあれこれに興味がないだけだつつの。

数日後、家にこつそりと先日のドレスが返ってきました。赤ぶどう系の飲み物だったので結構濃いシミになってたんですが、まるでなかったかのように綺麗に落ちていました。すごいなあ、お城のクリーニング担当さんはいい仕事してますねえ。

お借りした、というか、いただいてしまった王女様のドレスは大事にクローゼットの中にしまひ込みました。もしかして後日お返しすることになった時のためにね。

華やかなお城のパーティーの後は、また日常に戻ります。

お父様は相変わらずワーカホリック気味で、バリバリ仕事してあまり家にいません。そんなある日、お出かけの支度をしているお父様を見て驚きました。

「あら、今回のお荷物、多くないですか？」

普段の荷物はトランクが一つ二つくらいなのに、今日に限っては鞆やトランクがいくつも馬車に運び込まれているので不思議に思っただけで聞いてみると、

「今回は領地じゃなくて別の国に営業してくるんだ。遠いところだから、帰ってくるのにひと月以上かかるだろう」

「まあ！ そんなに？」

なんと、長期の営業行脚でした。

お父様は基本、領地経営をしているのですが、たまに領地の特産品を持ってよその土地や国に営業に出ることもあるんです。

「しかも今回はいつものように馬じゃなくて、なんと船に乗って行くんだよ！ その国は全てが黄金でできていて、素晴らしい国なんだそうさ。この仕事が入手くいたらもっと豊かになれるぞ」

お父様が目を輝かせながら言ってますが。

なにそのジバング、エルドラド。

お父様、それ、騙されてませんか——？　ちよつと、いやかなり心配になってきました。

「そんな国、本当にあるんですか？」

あるっちゃあるけど伝説だったり、秘境・オブ・ザ・秘境だったり。

私には前世の記憶もありますし（世界史も勉強したよ！）、いたって冷静でしたが、

「まゝあ素敵！　それはお仕事頑張ってくださいませ！」

「お義父様、お土産を楽しみにしておりますわ！」

「私も〜！」

お義母様とリール、ニームは大はしゃぎしています。いや、まだ仕事が上手くいったわけじゃないし、その黄金郷（仮）が実在するのかどうかも怪しいですからね！

「ヒイズル皇国というところなんだよ。いつもより長く留守をするけど、よろしく頼むね」

お父様はそう言つて出かけて行きました。

お父様が営業に出かけてほほひと月が過ぎました。

お父様が留守の間、お義母様、リールとニームと私が何をやっているかというところ——。

「今日は〇〇伯爵家のパーティー、明日は△△侯爵家のパーティー、それから明後日は××伯爵家

のお茶会に呼ばれてますからね、ああ忙しい——」

パーティー三昧さんまいです。

お父様という精神的ストッパー不在の今、お義母様たちはフリーダムに遊びまくっています。

「そんなにパーティーに出てどうするんですか？」

さすがに遊びすぎだと思ってお義母様に聞いたら、

「そりゃあもちろん出会いを探してるのよ。せっかくお貴族様の仲間入りしたんだもの。リールやニーム、そしてリヨンにいい人を見つけないの。ウフフ」

確かに「豪商の娘」より「子爵家のご令嬢」の方が格上だけどさあ。

「縁談だと家格とか財産とか色々釣り合いとらなくちゃだけど、恋愛結婚だと愛さえあればいいじゃない？ パーティーでやんごとなきおうちの息子さんに気に入られて玉の輿……」

うっとりどこかを見ながら自分の妄想に酔いしれるお義母様。わあ……ロマンチストですね。

まあ確かにうちは子爵家ですから伯爵家との縁談が一番無難ですが、もっと上の方——侯爵家や公爵家になんて嫁入りしたら、後が大変だと思うんですけど。

「例えば、自分を隠して貴族のパーティーにきていた王子様と恋に落ちるとか？ ……ああ、なんて素敵なんですよ！」

お義母様、妄想から戻ってきて〜!! しかも貴族じゃなくて王子様狙ってた〜!!

そんなパーティー三昧に日々を過ごしていた私たち（私は不本意！）のもとに、港の役人という人が訪ねてきたのは、凄まじい嵐が都を襲った数日後でした。

「お父上の乗っておられた船が難破したそうです！」

難破!? ナンパじゃなくて難破!?

お役人さんは家族全員を呼んだのに、お義母様たちは「パーティーで疲れた」とか言ってリビングや各自の部屋でグダグダしていたので、私一人が玄関に出て応対してるんだけど……これ、一人で聞くには重すぎる内容だと思うのですが。

「……それは本当にうちの父なのですか？ それに、あなただって、本物のお役人さんかどうか……」

私はじつとお役人さんを見ながら言いました。ほら、「オタクのお父さんが大変な目にあつてます！ 急場をしのぐために現金を用意して〜」とかいう詐欺まがだと困りますからね！

すると私の心の声が聞こえたのか、お役人さんは自分の身分証明書を提示し、そして、

「残念ながら、難破船に乗っていたのはアベビル・ド・フォルカルキエ子爵の一行でございます。お父上様ですよね？」

すまなさそうに言いました。

しつかりはつきり聞こえてしまいました。完全にお父様（の名前）です。

異常な速さで鼓動を刻む私の心臓。手が震えるのを、ぎゅっと握りしめて誤魔化します。

「……はい、そうです。それで、父はどうなったのでしょうか？」

そして絞り出した声。

一縷いちるの望みをかけて尋ねました。

「先日の嵐に巻き込まれて船が難破してしまい、お父上は乗組員共々暗い夜の海に投げ出されてしまったそうなのです」

「それは誰から聞いたのですか？」

「運良く通りがかった船に助けられた乗組員の一人が先日帰国し、話してくれました」

「では父も……」

「助かったかもしれないし、そうでないかもしれませんが。今のところ、どこにもお父上の姿がありませんので……」

「そうですか……」

「生死はわからない」ということですね。

私とお役人さんでため息をついていると、

「いやああああ!! アベビルが、そんな、死んじゃったなんて!!」

「うわあ!？」

「びっくりした〜! お義母様!」

いきなり横で叫ばれて、心臓飛び出るかと思った! ドキドキドキ。

お役人さんと二人で飛び上がりました。

いつのまにかリビングから出てきて話を聞いていたお義母様が叫んだのです。顔が真っ青です。

「アベビル、アベビル! どうして私を残して逝っちゃったの!？」

「……………」

ちよつと待って。まだ死んだとは断定してないんですけど?

お役人さんも『決めつけるのはどうなの?』的な顔してお義母様を見えています。ですよね〜。

「お義母様、落ち着いてください。まだそうとは決まったわけじゃ……………」

「これが落ち着いてなんていられますかっ! ああ、アベビル、あなたまで私を置いて先に逝くなんて!!」

落ち着かせようと私がゆっくり話しかけても、むしろお義母様の取り乱しようはひどくなるばかり。全然聞く耳持ってません。

しかもお義母様の中でお父様はすっかり亡くなったことになってしまっているようですが、まだ殺さないでくださいます?

「お義母様、お父様はまだ行方がわからないってだけで」

「行方不明は死んだも同然！」

変なところできっぱり言い切るお義母様。

いや、だから。どうしてそうなるの？

あゝだめだ、全然落ち着かないわ。

これ以上お義母様の大変な姿を他人に晒すのもどうかと思った私は使用人を呼び、お役人さんの対応を任せ、取り乱しまくっているお義母様を家の奥に押しやりました。

とりあえずお義母様をリビングに連れて行きソファに座らせたのはいいのですが、

「また未亡人になっちゃった〜！」

「これからどうやって生きていけばいいのかしら？」

「次の旦那を探さなきゃ」

と、とにかく騒ぎまくりで。って、最後のセリフはどうなの？

この状況をどうしたもんかと思っていたら、騒ぎを聞きつけたリールとニームも自分の部屋から

出てきました。

この二人なら血の繋がった母娘おやこですから、お義母様をなんとかしてくれるかなあって思ったんですけど……甘かった。

「あの、実は先ほど……」

嘆き悲しむお義母様の姿を見て驚くりールとニームにさっきの話をしようとしたところで、

「お父様が亡くなっちゃったのよ!! また母娘三人残されたのよ!!」

お義母様、間違った情報を叫ぶのはやめてください。お父様の生死はわからないって、お役人さんも言ってたでしょうが。

「あ、違うんですりール義姉様。先日の嵐でお父様の乗った船が難破してしまっ、お父様が行方不明に……」

私はできるだけ落ち着いて正しい情報を伝えようとしたのですが、

「なんですって?! お義父様が亡くなったっていうの?!」

「いやああああ。また三人で生きていけというの?!」

お義姉様たち、私の話ではなくお義母様の話の方を信じちゃいました。

……デジャヴ。

お義姉様たちも私の話を最後まで聞かずに絶叫。間違いなくあなたたちは母娘ですね。人の話は最後まで聞こうよ。

お義母様一人でも大変だったのに、そこに義姉たちまで加わってすっかりパニック。もうどうしたらいいの！

頭から水をぶっかけたら落ち着くかしら……って、そんなことできないわね。仕方ない。

ワァワァ騒ぐ三人を置いて私は台所へ向かい、気付けのブランデーを持ってきました。

「これ飲んで落ち着いて。とりあえず今日は寝てください」

「「わかったわ」」

三人にブランデーの入ったグラスを渡して飲ませました。

無言でグラスの中身をチビチビと舐めて<sup>な</sup>いる三人。ようやく静かになりました。

この人たちの中でお父様はどういう立ち位置なんでしょう？ やっぱり金づ……げふげふ、社会的後ろ盾、くらいなものかな？ お父様がいなくなると『悲しい』というより『困る』って感じがあります。

本当にお父様、どうなっちゃったんでしょうか。

お義母様の言うようなことになっていないことを願うだけです……。こればかりは連絡がくるまでわからないからなあ。今の私にできることは、お父様のご無事を祈ることだけですよね。大丈夫、私だけはお父様の無事を最後まで信じてますから！

静かにブランデーを舐める三人を眺めながら物思いに耽かたっていたのですが、

「もうなくなっちゃったわ！ これくらいじゃあ酔えないわよ、もつと持ってください！」

「リヨン〜！ ブランデーのおかわり〜！」

「おつまみも何か作ってえ〜！」

「……………」

気付けについてブランデー渡したのよ！ がつつり飲めって言っていないわ！

落ち着くどころか、なぜか酔っぱらい化した義母と義姉。

ええ〜もうヤダァ……。

ごねる三人に仕方なく台所へと向かう私。もういいわ、酔っ払ってさっさと寝ちゃってください。使用人たちはとくに帰っている時間なので、私は台所にあった適当な食材で適当なおつまみを何品かパパッと作り、ついでにブランデーをボトルごとリビングに持って行きました。お代わりは自分で作ってね！

あ〜もう。この人たちのせいで落ち込んだり悲しんだり考えたりする暇ないじゃないですか！

……そういえば、お母様が亡くなった時も、お父様が取り乱しまくったせいで悲しむ暇なかったなあ……。

それからお役人さんから続報が届くことなく、お父様の行方は依然としてわからないままでした。

「こうなったら次を探さなくちゃ！」

変なところでお義母様がフアイトを燃やしています。

それにひきかえお義姉様たちは、

「お母様だけじゃなくて私たちのも探してよう〜」

「私はリール姉様と違って、お母様にくつついていくのでもいいわ」

「何よニーム」

「何よ」

やる気があるのかないのかわからないことをグダグダ言っているので、お義母様は二人をギロツと睨むと、

「あんたたちのももちろん探すわよ！ 今まで以上に気合い入れてパーティーに行くわよ！」

婚活推進宣言です。

今までも結構頻繁にパーティー参加してましたよ。これ以上増やすってあなた、お金どーすんの！

パーティーに出るのもお金がかかるんです。ドレス代だの宝飾品代だの、お義母様たちはお金遣いが荒すぎるんですよ。

今まではお父様がワーカホリック気味に働いてくれましたのでどうってことありませんでしたが、そのお父様は行方不明です。当然収入は激減です。これからは領地から得られる収入しかないんですよ？

「お義母様、あの。お父様がない今は、あまりたくさんお金を使うのは得策じゃないと思うんですけど」

リールもニームも言わなさそうなので、私がお義母様に進言すると、

「じゃあ生活費を切り詰めましょ。そうねえ、手始めに使用人はやめさせようかしら。お給料がもつたないない」

いいこと思いついた！ みたいな顔でそんなこと言うのやめていただきたい。

お義母様があまりにとんでもないことを言い出したのでびっくりしてしまいました。誰が家事するんですか。

「え？ では、掃除洗濯炊事はどうするんですか？ 誰がやるんですか？」

私は慌てて止めたのですが。

「あら、リオンは得意でしょ？ お部屋はいつもきっちり片付いてるし、料理もできるじゃない」

何を言ってるの？ みたいな顔でこっちを見てくるお義母様。

「はい？」

「だ・か・ら、使用人の代わりにリヨンがやるのよ。そうしたら使用人に払う給料が浮いて、その分衣装や宝飾品代に回せるでしょ！」

何言ってるのこのババア。

あまりのトンデモ理論に開いた口がふさがらないっちゅーの。

「……………」

ドヤ顔でトチ狂ったことを言うお義母様に私が絶句していると、

「いい考えじゃない、お母様〜！」

「リヨン、私の部屋もキッラーに掃除してね！」

なんて、リールとニームまで乗っかってきてるし！

ちよつと待って、私が使用人になるってことで話が進んでるんだけど!? おかしくない? なんて『生活費切り詰める』って話が『私が使用人になる』って話にすり替わっちゃってるの? おかしくない?

「あの〜、私が使用人って……………」

このままどんどん話の流れでいくのも困るので落ち着いて、冷静に話をしようと思ったのに。

「せっかくなんだし『サンドリヨン』<sup>はいかぶ</sup>って改名したら? 朝から晩まで灰をかぶって掃除するの」

「お母様、冴えてる！」

「リヨンじゃなくてサンドリヨンね！ いいじゃない、似合ってる」

はあああ？ うち、灰だらけの家じゃねえし。……って、ツッコミどころはそこじゃない。

『サンドリヨン』に改名しろって？ 馬鹿言ってるじゃ……

えっ？

『サンドリヨン』って？ 私が？ サンドリヨン？

えええっ!?

ここ、『サンドリヨン』の世界だったの~~~~!?